

シミュレーション最前線

Simulation Forefront

2016 Nursing Sun 特集号



昨年に続く第2回目の開催となった「Nursing SUN Meeting」が2016年8月6日、兵庫大学地域医療福祉研修センター（メディカルシミュレーションセンター）で開催されました。“シミュレーション教育”は、看護実践能力を着実に身に付ける有効な手法として、関心がますます高まっています。今回のテーマは「基礎から臨床へ、シミュレーションにできること」です。看護教育の中にシミュレーションを用いた演習を積極的に取り入れ、成果を上げている講師陣が揃ったことで、参加者には大きな学びの場となりました。

6

2016 Nursing SUN in Hyogo

基礎から臨床へ、シミュレーションにできること

オープニングは兵庫大学地域医療福祉研修センター長の長尾光城先生が、14年前にオーストラリアの大学を訪問した際、偶然、シミュレーション教育を見る機会に遭遇し、その教育手法に感心したという経験を披露。今回、Nursing SUN Meetingを兵庫大学で開催できることに喜びを感じるとし、「質の高い看護教育を実現するためにも、しっかりと学び、いろいろな分野で活用できるシナリオをつくっていただきたい」とあいさつしました。

基調講演

『臨床的思考を学ぶ看護基礎教育のシナリオデザイン』

高知県立大学 看護学部 急性期看護学
教授 大川宣容 先生

大川先生は冒頭、「臨床実習に行くと頭が真っ白になって授業で学んだことをうまく実践できない」という学生の声がかきかけとなり、教育の在り方を真剣に考えてきたことを伝え、「この課題を皆さんとともに解決していきたい」と話を始



長尾光城先生



大川宣容先生

めました。日本の社会構造や医療を取り巻く環境は大きく変化しています。そして、それに対応しなければならない看護職に求められる能力も変わってきています。厚生労働省の検討会がまとめた『看護教育の内容と方法に関する検討会報告書』の中で示された“看護基礎教育で育成する能力”に触れながら、「看護基礎教育については、(中略)看護に必要な知識や技術を習得することに加えて、いかなる状況に対しても、知識、思考、行動というステップを踏み、最善の看護を提供できる人として成長していく基盤となるような教育の提供が不可欠である」という記述に着目。知識を使って問題を解決する練習が重要であるとして、シミュレーションにも触れていきました。そのうえで、「医療者が行う実践には共通する構造がある」と

述べ、自身も用いている日本医療教授システム学会が開発したGOLDメソッド (Goal-Oriented Learning Design method: ゴール達成型学習デザイン) の使い方を具体的な症例をもとに紹介しました。

最後に、「看護技術を単なる手順として教えるのではなく、医療と生活の両方の視点をもって患者さんの置かれた状況を理解し、的確な判断のもと、責任をもって看護を実践できる学生を輩出していかねばならない」と講演を締めくくりました。

分科会

他大学の取り組みに学ぶ

▶「AHA BLSヘルスケアプロバイダーコースを取り入れた大学教育カリキュラムの在り方」

敦賀市立看護大学 看護学部看護学科
講師 河合正成 先生

敦賀市立看護大学は今年度から救急看護学のカリキュラムの中にアメリカ心臓協会 (AHA) が認定する一次救命処置教育訓練プログラム「BLSヘルスケアプロバイダーコース」を組み込んでいます。これは日本の看護大学として



河合正成先生

は初の試みです。河合先生はカリキュラムに組み込んだ経緯やBLSヘルスケアプロバイダーコースの内容、6月に40人の学生がBLS認定プロバイダー資格を取得したこと、さらには学生たちに行った実際の授業内容などを紹介したうえで、本分科会に参加した人たちに学生が受けた授業を体験してもらいました。最後に、導入した効果として「コースを受けた学生が受けていない学生に手技を教えるなど、近年、看護教育で求められている能動的な学習につながったほか、コミュニケーション能力の向上も見られた」と述べました。

▶「Simulationを活用したアクティブラーニング～授業をどう組み立て、動かすか～」

東京医科大学 医学部看護学科 こども看護学・国際看護学
教授 永島美香 先生

永島先生は、一人ひとりの学生に看護実践能力を確実に身に付けさせる方法として看護学科が導入している“チーム基盤型学習法 (TBL: Team-Based Learning)”により知識の定着を図った後に、その応用課題で使用したシナリオを用いて“シミュレーション”を展開していく方法を紹介しました。最初に、看護実習期間中に小児急性期患者に触れる機会がほとんどない

問題を解決するため、シミュレーション教育を開始し、その後、TBLを導入するに至った経緯を説明。その中で、「シミュレーションは教育効果が高いものの、一度に大勢の学生を相手に実施した場合、一人ひとりの学生が患者シミュレータに触れる時間が少なくなってしまう、看護実践能力をしっかりと身に付けさせることは難しい」とシミュレーション教育を単独で実施した場合の課題を提示しました。そのうえで、「事前にTBLを実施しておけば、学生がシミュレーションの授業を受ける際の理解度が全然違ってくる。基礎的な知識がきちんと入ってからシミュレーション教育に移っていくので、教育効果がさらに上がる」と続け、TBLとシミュレーションの連動により、効果的なアクティブラーニングを実施できるようになったことを成果として挙げました。

▶「シミュレーション教育と研究の視点」

神奈川県立保健福祉大学
保健福祉学部 看護学科 成人・高齢者看護学分野
教授 織井優貴子 先生

織井先生は、シミュレーション教育を定着させるための研究の視点について考察しました。厚生労働省はフィジカルアセスメント技能を向上させる手段として、患者シミュレータの活用有効性を認めています。そこで、看護教育の歴史に触れた後、「シミュレーション教育を定着させるためには研究が必要であり、そのための視点はいろいろある」と述べ、海外の研究を紹介しながら“看護教育者の知識と理解”“多職種連携の学習デザイン”など具体的視点を挙げました。そして最後に「皆様とともに、少しずつでもよい成果を上げられるよう頑張っていきたい」と呼びかけました。

▶「実習場面を想定した、シミュレーション演習の実践～教育体制の変化の中で生じた課題とその克服～」

東都医療大学 ヒューマンケア学部 看護学科
准教授 中村織恵 先生

2009年に私立の単科大学として開学した東都医療大学では、1学年で100名を超える学生が学んでいる中で、当初は教員の数が少なかったことから、どうしてもグループ演習が多くなってしまい、個が埋没しがちという課題が見られました。なかでも術後の急性期ケアに関しては、実習期間中に



永島美香先生

1度しか経験できないことが懸案となっていました、こうした事情を説明した中村先生は、保有する患者シミュレータをフル回転させることで、このハンデを補うようにしてきたことや、学生たちが自主練習できる環境を整えていることを詳細に説明し、課題克服に向けた取り組みを行っていることを紹介しました。

▶「学びをツナゲル・学びがツナガル～1年生から始める基礎教育とシミュレータの融合～」

公立大学法人岩手県立大学 看護学部 基礎看護学講座
講師 三浦奈都子 先生

三浦先生は、形態機能学の授業で実施しているシミュレーション教育を中心に紹介しました。岩手県立大学では1年生のうちからシミュレータを用いた演習を実施していますが、シミュレータを使うと形態機能学を学ぶ動機づけになっていることをアンケート調査の結果をもとに紹介し、「バイタルなどの異常な状態を再現できることが学習意欲に結びついているのでは？」と推測しました。また後半では、グループワークを実施。参加者たちが日ごろ感じている課題や改善していきたい事項などを共有し、各グループが検討結果を発表した後、岩手県立大学の事例をもとに、解決策案を提示しました。



中村織恵先生



三浦奈都子先生

▶「基礎教育から継続教育へ～臨床看護シミュレーション教育者育成のためのカリキュラムデザインとその成果～」

東京医科歯科大学大学院 保健衛生学研究科
看護キャリアパスウェイ教育研究センター
特任講師 前田留美 先生

看護キャリアパスウェイ教育研究センターは、臨床経験豊富な看護師に教育に関する研究手法を学んでいただき、研究的な視座を持って大学・臨床でより一層活躍できる看護教育者を育成することを目指しており、「シミュレーション教育プログラムの設計法を学ぶ」ゼミを取り入れています。前田先生はこのゼミの中で、それぞれの学生が所属する施設で使



前田留美先生

用できる研修プログラムを組んでもらい、併せて演習内容も設計するようにしたことを紹介しました。その成果の一つとして、プログラムの設計能力を身に付けただけでなく、スタッフに対しての投げかけ方を学んだことで、実際にプログラムを自施設で実施した結果、スタッフの行動変容につながったという、予想もしなかった効果を得られたことを紹介しました。

▶「シミュレーションでできること」

兵庫大学 健康科学部 看護学科 教授
メディカルシミュレーションセンター長/看護・介護研修センター長
新田幸子 先生

新田先生はシミュレーション教育のメリットと実施する際に留意すべき点について説明しました。「シミュレーションは看護実践能力向上を目的とした教育方法として有効で、学生や看護師は技術に加え、実践的な問題解決法も学ぶことが



新田幸子先生

できる」と前置きしたうえで、「教育目標にあわせてシミュレータをどのように使用するか、選択することが大事である」と強調しました。また、「看護師に求められる倫理観、看護観などを取り上げることも重要で、その点をおさえておかなければ、技術偏重に陥ってしまいかねない」と注意を呼びかけました。また、「2025年問題に向け国が構築をめざしている“地域包括ケアシステム”に対応できる人材を育成するため、シミュレーションセンターを活用していく」と、現任教育への取り組みにも意欲を示しました。

触れて理解する

▶「かんたん便利な“神ツール”SimPad～講義・演習・実習前明日から使えるシミュレーション～」

Laerdal ESS Team

SimPadは多領域のシミュレーション教育者の声をもとにシミュレーションを簡単かつ効率的に行えるよう開発・設計されたタブレット端末で、タッチスクリーンに触れるだけで患者シミュレータにアクセスできるので、シミュレーション教育がとても簡単に



操作をしながらSimPadの活用を学ぶ

実施できます。また、学習者の行動や操作の記録が残せることから、評価ツールとして使うことができ、応用すれば研究にも使えます。本分科会では、参加者一人ひとりがSimPadに直接触れながら活用法を具体的に学ぶとともに、実際の症例をもとにしたシミュレーショントレーニングを体験しました。参加者からは「SimPadがあれば、いまずぐにでもシミュレーション教育を実施できそう」「データを蓄積できる点に魅力を感じた」といった声があがりました。

クロージング

シミュレーションを再考する

兵庫県立大学教授で地域ケア開発研究所長を務める増野園恵先生のファシリテーションで各分科会を振り返りました。いずれの分科会とも非常に興味深い内容だったことを踏まえ、「基礎看護教育や現任教育の中で、なぜシミュレーションを活用するのか」という視点をもとに、次の3つのポイントをもとに再考することを参加者に呼びかけました。



増野園恵先生

Point 1 なぜ、シミュレーションを用いるのか？

シミュレーションさえあればすべてが解決するわけではない。世界中のいろいろなところでシミュレーションが導入されているが、その理由は、“患者安全”を最大限に配慮しているということ。患者シミュレータを用いれば、患者を実験材料とすることはなく、なかなか遭遇しないような症例でも繰り返しのトレーニングができ、実際に遭遇したときに備えることができる。たとえ失敗したとしても、そこから学ぶことができる。

Point 2 シミュレーションで何を達成したいのか？

何もかもをシミュレーションに置き換えればよいのではなく、学習段階に合わせた目標の設定、指導方法の選択が大事である。シミュレーションは他の教育法と組み合わせることにより教育効果が高まることが知られており、目標にあわせて適した教育法を選択すべきである。そのためには、教育法に関する知識も身に付けておく必要がある。

Point 3 シミュレーションの準備をどの程度行うべきか？

シミュレーションは、患者シミュレータとシナリオさえあれば実施できるというものではない。教員、スタッフの準備が整っていることが大事で、学習理論もおさえておく必要がある。ただし、すべてが完璧になるまでシミュレーション教育を実施しないという考え方は好ましくない。多くの教育者はシミュレーション教育に従事しながら自身も学んでいる。

最後に、「シミュレーションの可能性は無限である。ただし、ときには発想の転換も必要なので、Nursing Sunのような機会を通じて仲間を作り、一緒によりよいシミュレーション教育の在り方を追求していきましょう」と締めくくりました。



クロージングのようす

Laerdal Solutions Bar

レールダルの製品に直接触れる機会となった Solutions Bar



シミュレーション最前線
Simulation Forefront
2016 Nursing Sun 特集号



SimStore™
Making Simulation Easier

SimStoreはシミュレーション教育用のシナリオデータベースです。さまざまなバックグラウンドやレベルに合わせたシナリオをご用意しています。詳しくはレールダルのカスタマーサービス(0120-309-060)にお問い合わせください。

www.mysimcenter.com